

令和二年（二〇二〇）二月  
山形大学紀要（人文科学）第十九卷第三号別刷

『百首略解』の翻刻と考察  
—近世後期庄内歌壇の側面—

藤 田 洋 治  
（地域教育文化学部）

## 『百首略解』の翻刻と考察

### ―近世後期庄内歌壇の側面―

藤 田 洋 治

(地域教育文化学部)

一、はじめに

近世後期における庄内歌壇は、庄内藩九代藩主酒井忠徳（一七五五～一八一二）が、和歌を愛好し、宮部義正そして冷泉家に師事し、堂上歌壇との交流があったことが知られている。その影響もあり藩内に和歌への関心が高まり、和歌を詠ずる者も多かった。特に、女流歌人の杉山廉（注）（一七三八～一八〇八）は多くの門弟を育て、白井固（一七七一～一八三八）、池田玄斎（一七七五～一八五二）、建部山比子（一七七八～一八八三九）らが現れ、多くの詠草を残しているとともに、和歌作品の注釈も残している。

中村知至の『古今和歌集遠鏡補正』が江戸で天保十四年（一八四三）に橘守部などの序を以て刊行され、庄内歌壇における和歌注釈として一般に知られているが、実はこの本は、庄内において知至の師であった白井固が古今集を講じた記録に基づいたもので、白井固には、その他にも『可久藻草』、『藻塩草』、『国府論』など幾つかの

著書が存在する。なおこの論では名を白井固（カタシ）としておくが、重固（じゅうこ）とも、また書名には源固と記したものもある。「源固」は、清和源氏を表わす「源」を記したものである。

この度、白井固の『百首略解』を翻刻し、その内容を明らかにすることとともに、近世後期の庄内歌壇の動きについても考察を加え、その特性の一端を明らかにしたい。

『百首略解』は、小倉百人一首の注釈書で、近世期に多くの注釈書が出版されているが、白井固は、契沖の『改観抄』や賀茂真淵の『和歌初学』などの注釈を基本に、直前に出版された香川景樹の『百首異見』をも視野に入れた上で、序文に自ら記すように「女童の見やすきやうに」書かれた注釈書である。ただし、その原本は既に散逸し、昭和五年に筆跡までもほぼ忠実に透き写した伝本が慶應大学図書館に伝存しているものの、仮名の形が不明瞭で全文を正確に把握できないものである。一方、『百首略解』は、その草稿本が鶴岡市郷土資料館にあり、白井固自身の筆跡であることもわかった。その草稿本と清書本の写しを比較すると内容はほぼ一致し、注釈の内容を明らかにすることができる。なお、書名は『百首略解』、『百人一首略解』の両方が用いられているが、本論では外題の『百首略解』で統一する。

二、伝本について

慶應大学蔵本は、外題は『百首略解』、内題は中央に『百人一首略解 白井源固 先生肉筆』、端造り題には『百首略解』とあり、函架番号は「146 / 23 / 1」、表紙は丁子茶の袋綴本で、大きさは、縦二六・五、横一九・一センチ、全五六丁で、遊紙が前後に一枚ずつある。一面行数は一〇行、和歌は一行書き、作者名、和歌に続いて、注釈本文は二字下げで記される。本文一丁目の冒頭上部に、おそらく原本にあった蔵書印を朱で書き写したと思われる「志田氏蔵書印」とある。また遊紙中央には「百人一首略解 白井源固 / 先生肉筆」とあり、その部分に重ねて「慶應義塾図書館」と蔵書印が押される。また、本の中に畳み込んだ紙（縦二六・八、横三八・六センチ）があり、そこには「此書は北海道名寄の矢口親六氏 / 所蔵白井總六郎重固の大人の自筆 / 本を影写せるもの也 / 昭和五年八月十六日 花押」と記される。なお、この書写者は花押からは誰のものか、判断できなものの、昭和五年に「影写」、おそらく透き写されたものとわかる。グーグルブックスで<sup>(注2)</sup>見ると、一見固の自筆かと思われるほど、筆跡が似ている。

鶴岡市郷土資料館蔵本は、外題『百首略解』、内題は僅かに虫損があるものの『百首略解 全』とある。袋綴の縹色表紙の本で、縦二

三・九、横一六・八センチ。本文は罫紙に書かれ、全五四丁。一面一〇行、和歌も一行で記されている。作者、和歌、続いて二字下げで注釈本文が記される。恵慶法師の部分には張り紙がなされ、その注釈の末尾に「先日遣候草稿候へとも御取替 / 御写給存候」と書かれているが、本文と同じ罫線を使用していて、筆者白井固の筆跡でもあり、受け取った訂正の文章をそのまま貼り付けたものだとわかる。

なお、慶應大学蔵本の蔵書印の写し、「志田氏」は、あるいは志田義貫<sup>(注3)</sup>（一七九八—一八七六）の可能性が高そうである。志田義貫は出羽最上の出身、和歌を学ぶために伊勢の足代弘訓にのものとに赴き、弘訓から庄内に優れた歌人がいると白井固を紹介されて、鶴岡に移住している。このことは、伊勢の国学者たちとの交流と白井固の和歌文学に対する知識が伊勢においても評価されていたことを示すものである。また清書本そのものの持ち主である矢口氏は、白井固の孫にあたる惣四郎が白井家より養子に入った家で、明治の初めに北海道に渡り現在は札幌に在住しているとのことである。

三、草稿本と清書本

草稿本と清書本とは、ほとんど一致するものが多いが、文末が多

少変化しているものも多い。以下、草稿本を「鶴岡本」、清書本の写しを「慶応本」と仮称する。引用は、便宜上句読点を付しているが、改行位置は原本のままである。

【例一】 文屋康秀

鶴岡本

吹<sup>うち</sup>から<sup>吹</sup>に秋の草木のしをるれはうへ山風をあらしとい<sup>て</sup>ふらん

古今秋下、新撰萬葉に、打吹丹秋之草木之

芝折禮者郁子山風緒荒之云濫とあり。哥

の意は、吹たつまゝにかく草木のしをるれはう

へなり。山の風をあらしといふことはと也。この

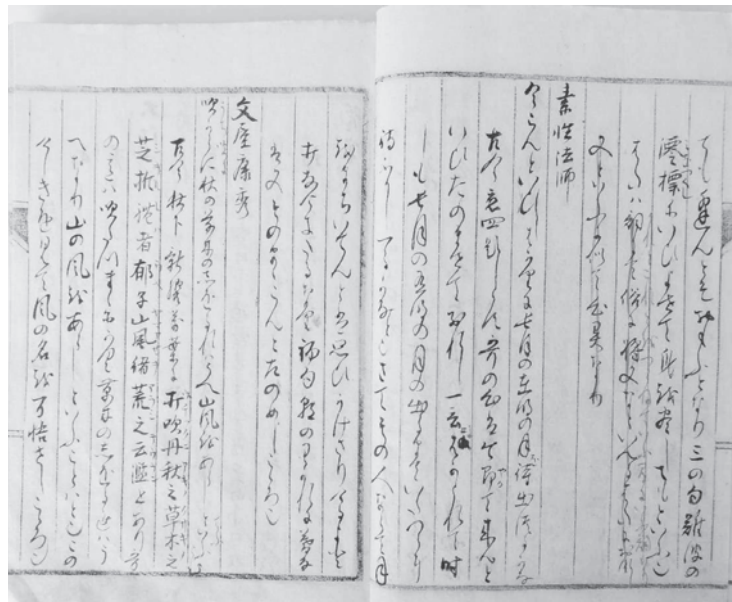
けしきを見て風の名を了悟せしこゝろ也。

うへは諸の字を例て心にうけかふ意の詞也。

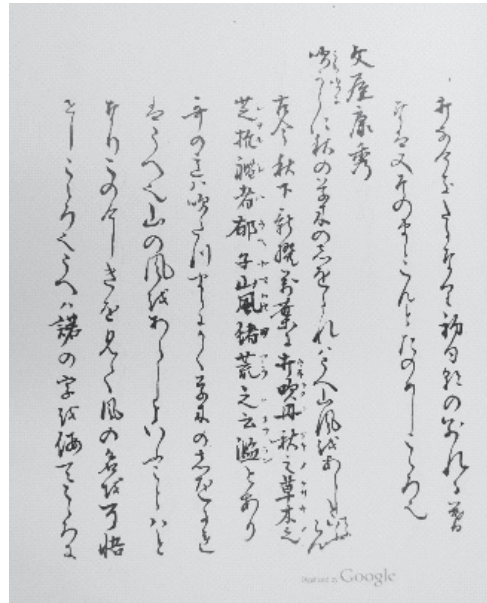
あらしとは物を吹あらすなと云<sup>あらすの</sup>こゝろにて

荒きものと云にはあらず。

(写真1 鶴岡本 素性法師・文屋康秀の部分)



(写真2) 慶応本 文屋康秀の部分



慶応本

文屋康秀

吹からに秋の草木のしをるればうべ山風をあらしといふらん

古今秋下、新撰萬葉に、打吹丹秋之草木之

芝折禮者郁子山風緒荒之云濫とあり。

哥の意は、吹たつま、にかく草木のしをるれは、うへ也、山の風をあらしといふことはとなり。このけしきを見て風の名を了悟

せしこゝろ也。うへは諾の字を例てこゝろにうけかふ意の詞也。あらしとは物を吹あらすなど云あらすのこゝろにて荒きものと云にはあらず。

両者には漢字・仮名の相違の外には、「あらすの」が傍書となつてゐるか、本文文化してゐるかの相違があるに過ぎない。注釈の特徴として、和歌本文における傍書がある。ここでは、『新撰万葉集』の本文との異同を傍書している。鶴岡本では、傍書が朱筆であり、写真の右の元良親王の注記の一部を朱で抹消していることでもわかるのだが、本文を書き終えた後で、補筆、修正したものである。また和歌の注記は、例えば山部赤人の和歌などでは万葉集の本文との異同を記すというように、勅撰集や家集との異同を記している場合が多い。

【例二】 法性寺入道前関白太政大臣

鶴岡本

わたの原漕出て見れば久方の雲井にまかふ奥津しら浪  
詞花雑下、海上遠望といふことをよめる、と有。  
海原遠く見渡せは限りなき空のみとり

に沖津しら浪の立つ、き、空も浪かもひとつにつらとまかふ

と也。かなた「まかふ」は混する意なり。漕出の詞、此哥に

用なく又沖にしら浪の立は大風波なるへきに、

流るにあらざるよりは漕出へきやうなし。この説

は前にいへれは略つ。

### 慶応本

わたの原漕出て見れば久方の 雲井にまかふ奥津しら浪

、詞花雑下、海上遠望といふことをよめる、と有。

海原遠く見渡せは限りなき空のみとり

に沖津しら浪の立つ、き、空も浪もひとつに

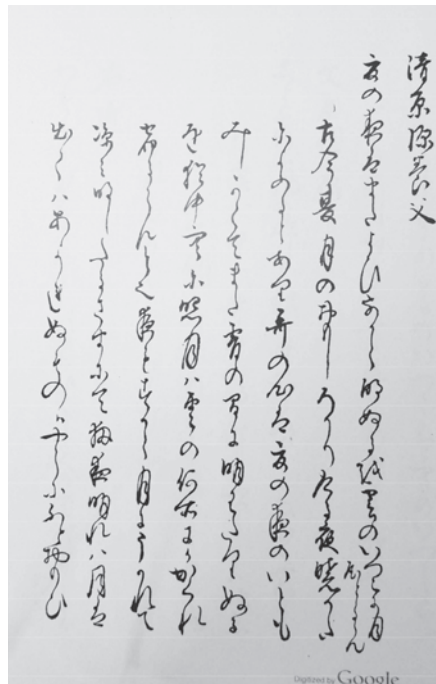
らなりたる也。「まかふ」は混する意也。

注釈が大きく相違することはないのであるが、この法性寺入道前  
関白太政大臣の場合のように、注釈本文を墨で抹消し、訂正本文を  
傍書した例が幾つか見られる。ここでも草稿本の後半が抹消され  
て、慶応本の注釈は短いものとなっている。

清書本そのものが失われている現状で、その透写本の存在は大き  
い。しかし、かなり忠実に筆跡まで透写したと思われる、脱字を補つ  
た箇所も同じように右に小字で書いてもいる。しかしながら、それ

でも判読しがたい箇所も少なくない。

(写真3 清原深養父)



右に清原深養父の注釈の前半部分を掲げたが、注釈本文の一行目  
「月のおもしろかりける」や二行目にかけての「暁かたによめるとあ  
り」、また六行目「涼み明したるさまにて」、最終行「出てはあられ  
ぬもの、やうに」など、判読しにくい箇所が所々に見られるのであ  
る。このように筆跡を丁寧になぞつたにも関わらず、どう見ても  
違った文字に見えてしまう箇所も少なくない。慶応本がグーグル  
ブックスで紹介されて久しいのであるが、この注釈に関する論考が



出て来なかった理由がこのような判読不明な文字にしばしば出会うことであろうと思われる。草稿本の存在があつて、両者を比較することにより初めて読解できた部分が少なくない。

なお注釈の中に幾度か見られる「即て」という語は、草稿本の索性法師の注に「即て」と振り仮名があり、「やがて」と解したが、この用字は初めて見るものである。

#### 四、注釈の特色

『百首略解』の内容は、先に掲げた本文でもわかるように、わかりやすい簡潔な注である。契沖の『改観抄』や真淵の『和歌初学』を読み、香川景樹の『百首異見』に触れながらも、実に短いものとなっている。おそらくその理由は、序に見える「女童」向けに「心えやすからんばかり」に作成したものだと思われる。

しかしながら、勅撰集の詞書を引用し、和歌の内容を簡潔に記していくというだけでなく、万葉集や家集などの他の撰集における本文異同を丁寧に拾っている。例えば陽成院の和歌「恋ぞつもりて淵と成ぬる」の「つもり」に『古今六帖』の異文「たまり」を傍書し、注釈の中で「六帖に此御製を「恋ぞたまりて」とあるも水の縁にてたまるといひしなるべし」と記し、藤原基俊の「契りおきし」につ

いても初句に「いかにせん」、下句を「たのめし秋も暮果ぬめり」と傍書し、『袖中抄』の本文のほうが「哥のこゝろ聞えやすく姿もよろしかるべし。」と記している。読みに関しても、紀友則の和歌では「しづごゝろとこもじ濁るべし。」と基本的な読みに対しても注意を喚起している。

当然のことながら、香川景樹の『百首異見』に関しての言及も多い。例えば、喜撰法師の和歌に関して「百首異見の説おだやかなるべけれど、『人はいふ也』の結句いかにもとこゝろえがたきやうなればかりそめに云なり。猶あはせ見るべし。」というようにほとんどの引用では賛意を示しながらも自分なりの解釈を加えている。

藤原俊成の注の頭注に「思ひ入とは俗におもひ込むなどいふ如し」というような俗語を用いた説明もあれば、西行の頭注に「真淵云、かこちは仮託なり。」とさりげなく先学の注をも紹介している。

#### 五、近世後期の庄内歌壇

冒頭で触れたように、庄内歌壇は、近世後期に多くの人材を輩出するとともに、注釈をも残した。藩主酒井忠徳自らが堂上歌壇との交流があったばかりでなく、女流歌人の杉山廉も冷泉家と師弟関係にあった。また白井固を初めとして、大著『弘采録』の著者・池田

玄斎、建部山比子、石田畔見などが現れ、多くの詠草を残しているとともに、和歌作品の注釈も残している。国学者、鈴木重胤も幾度かこの地を訪れ、玄斎や固、山比古達と交流しているし、山比古は京都の藤原貞直にも師事し、和歌を学んでいる。このような風土の中で、池田玄斎に師事した服部正樹は、『古今老のすさび』、『後撰老いのすさび』、『拾遺老のすさび』という三代集の和歌全てに注釈を付けるという作業を行なっていく。その注釈の引用が多岐に及び、また俗言でもって意味を説明するなどの特徴があり、その注釈姿勢の根源を探るためにもこの『百首略解』を読み解く必要があった。

さて、和歌研究をひたすら続けていった庄内歌壇ではあったが、時期があまりにも幕末に近く、武士階級中心の彼らは、時代の流れの中で和歌研究から離れざるを得ない状況になる。庄内藩は、徳川四天王の酒井家の藩であり、時代の潮流をともに受けることとなる。そして、これら注釈書もまた、密かに子孫が先祖の功績として持ち続けるという形になってしまったと考えられる。このことについては稿を改めて述べたい。

注1 杉山廉 久米慶山、宮部義正、次いで冷泉為泰に師事して和歌を学び、多くの歌人を輩出し、著書に『廉女歌集』、旅日記『おそざくら日記』がある。

## 『百首略解』の翻刻と考察

### 翻刻 凡例

- 一、翻刻にあたって原本を忠実に現代の漢字・仮名に活字化する。こととし、改行の位置は原本のままとした。ただし、異体字は現行の文字に、また読みやすさを考慮して濁点を付した。送り仮名についても、原文をそのまま踏襲している。
- 二、便宜上、丁の終わりに（二三・オ）のように丁数と表・裏を示した。
- 三、和歌の冒頭に歌番号を付した。

### 百首略解

百人一首の注釈、むかしよいかとおほかり。されど

注2 慶応本『百首略解』のグーグルブックスのアドレスは、  
[https://books.google.co.jp/books?vid=KEIO10811719260&redir\\_esc=y](https://books.google.co.jp/books?vid=KEIO10811719260&redir_esc=y)  
 注3 志田義貴 出羽最上郡出身、柿崎氏。鶴岡では足軽組に編入されて白井固に仕え、後に志田氏の養子となる。『新編庄内人名辞典』による。

る。白井固、池田玄斎、建部山比子は、杉山廉を含めて、『国学者伝記集成』（名著刊行会・平成二十三年刊）には記載がないが、『和学者総覧』（汲古書院・平成二年刊）には見えている。『新編庄内人名辞典』（庄内人名辞典刊行会・昭和六二年刊）には詳しい伝記が掲載されている。



ふかきいたりもなく、ひとわたりなるがうへに又

ときひがめられたるもすくなからず。契沖法

師の『改観抄』、真淵翁の『初学』こそ、こまやかに物

せられて委しかりけれ。されど中にはいぶかしみ思ふ

ふしらまじれるを、この頃京なる香川景樹が

『百首異見』を見るに、こと広く『改観』・『初学』のあ

やまりをあげつらひたる、げにことわりあき

らかにおぼゆれば、むすめ孫どもなどに見せ

ぬれど、ことぐさひろく多かるに、中／＼見まど

ひて歌の心もとみにわきがたきに、女童の見や

すきやうに、かきぬき給へとこふにぞ。一わたり心え

やすからんばかりにかいつゞりてあたふるなり。そ

が中には『異見』の説にたがへることのあるは、

人のこゝろの面の如しといふ古ごとのあればなり

けり。ひがごとおほからは、猶かの書とあはせ見

てたゞすべし。

みなもとの因

しるす 「(一・ウ)

### 天智天皇

1 秋の田のかりほのいほの苦をあらみ我衣手は露にぬれつ、

後撰集秋中、題しらず。歌の心は、秋の田を

守るとて、かりそめに結べる庵の苦があらさ

に夜もすがらもる露にわが袖はぬれに

ぬるゝとなり。秋の田のみのる頃、小屋を作

りて守り居る賤がうへなり。かりほの

いはとは、只かさねたる詞にて仮庵かりいほなり。

東屋のまや、筒井筒あづゝなど云におなじ。

あらみはあらさといふが如し。ぬれつゝ、

は軽くいふ詞にて、ぬれつぬれつといふ

にて濡かへる心也。此歌、後撰集に、天皇の御

製とあれど、この御代のさまならねば、誤

なるべしと諸注にいへり。

### 地統天皇

2 春すぎて夏きにけらし白妙の衣はすてふ天のかく山

新古今夏、題しらず。この御製、万葉に有

て、春過ハルスギテ而夏ナツキタル来良ラシ之白妙シロタヘノ能衣乾ココロモシケリ有天香アガノカ

来山ケギヤマとあり。今はこれをよみ誤れる成るべし。

「(二・オ)

御歌のこゝろは、いつしか春すぎて、夏

こそ早なへとりしかもまたしかり。おして

こそきたるらし、衣をかけほしたる天

しるべし。

のかく山のわたりを見れば、となり。白妙は

〔頭注〕てふは、てうといふごとくよみてそれを又

衣といはん枕詞なり。此御歌、新古今に夏

云俗にちよふと云如く、唱ふるなり。

の巻首に出たれば、昔より初夏のころに

説なせしかば、ときあやまれるなるべし。

柿本人麿

てふと云詞も古とたがへり。てふは、といふの

3 足曳の山鳥の尾のしだり尾のなか／＼し夜をひとりかも寝ん

約めにて、それをちふとも、とふともいひし

拾遺恋三、題しらず。上句序にて長といはん

を中昔より又てふを、はたらかしてちよふ

料のみ。さばかり長きこの秋の夜を我のみ

と云如く唱へし也。されば、衣ほすと

独寝んかと侘たる也。万葉に長永夜乎と

いふ天の香来山と云にては、きこえぬ詞也。

「(三・オ)

書を、昔よりなが／＼し夜とよみ来れ

さて、春過て夏来るらしは、時の忽ちうつ

るなり。近き頃或人ながきなが夜をとよ

りかはるを驚き歎かせ給ふ意也。衣乾は

みたるぞしかるべき。なが／＼しのし文字

今、俗に虫干、風干などいふにおなじ

いかゞ。なが／＼しき、なが／＼しくなどいはず

くて、五月雨の晴あがりたる頃、ほすなれ

は、とゝのはぬ詞也。後に長々し日など

ば五月の末六月の頃なるべく、初夏のこと

よめるは、この歌より口なれてよめる成べし。

にあらず。古歌に、冬過て春来たるらしと

いひ、又昨日こそ早苗とりしかいつの間に稲

山部赤人

葉そよぎて秋風の吹などの類、今と同じ。

4 田子の浦に打出て見れば白妙のふじの高柵に雪は降つ

きのふ冬にて今日春といふにあらず、昨日

新古今冬、題しらず。万葉卷三に出たり。

初句の「に」文字「ゆ」と有。「白妙の」は「真白にそ」と

あり。結句は「降ける」とありて今とたがへり。

後になほせしとか、あやまりしとかなるべし。

歌の心は、うち出て田子の浦より見れば

真白に富士の高ねに雪は降けるはと、たゞ見  
「（四・ウ）」

たるま、をのべたる也。いと高かる峯に雪

の白く見えたるさま、いづくはあれど

この田子の浦より望める絶景をあり

のま、にいひたるに、其時其興見る心地

せらる。げに今も此辺より見ればさること

にてこの歌の妙しらるゝなり。冬の部に

いたるは、雪といふよりなるべけれど、とき

しらぬ山の雪なれば雑の部などにこそ。

### 猿丸大夫

5 奥山に紅葉ふみ分鳴鹿の声きく時ぞ秋は悲しき  
「（五・オ）」

古今秋上、よみ人しらず。歌の心は、いつはあれど

奥山に散しきたるもみぢ葉ふみわけて、

鳴鹿の声きくをりぞ秋はことさらに

悲しきとなり。奥山に行て落葉ふみ分る

を見てよめるにはあらねど、只さるべからん

鹿のけしきを形容せしにて、「鳴鹿のこへ

きく時ぞ」といへるが歌のおもてなり。「春の

野にあさる雉子の妻恋に」など云歌にて見

るべし。これも春の野にあさるには意なく

して妻恋の声にありかしらるゝとなり。  
「（五・ウ）」

いまとおなじ。

### 中納言家持

6 鵲のわたせる橋におく霜の白きを見れば夜ぞ更はにけり

新古今、題しらず。この卿の時代の歌さま

ならねば、これより後の歌なるべし。家の

集に結句「夜は更にけり」とあるぞ正しかる

べき。歌の心は、霜のいと白く見ゆるは夜

や更ぬらん、げにふけにけりとなり。鳥

鵲橋のこと中昔よりよめりけれどこの

卿の頃には見えず。「鵲のわたせる」といふ  
「（六・オ）」

に意なし。只「橋におく霜の白きを見れ

ば」云々といへり。橋、板屋などは殊に霜の

さら／＼霜白く見ゆるものなればなり。

また霜は宵の間には見えす。夜更てし  
ろく見ゆるなれば也。

### 安倍仲麻呂

7天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出し月かも

古今羈旅、唐土にて月を見てよめる、と有。

空をあふぎて見れば月明くすみわたれ

り。是やわが故郷の三笠の山に出て、もと見

し月かと打ながめたるに、かぎりなき余

情ありてあはれ也。「かも」は、かと疑ひたるやう

の詞にて、「も」は助辞なり。古今の左注、土佐日記

などにしかくとその時の事をかきつら

ねしは、かくもいひ伝へたるこの有しに

よりてならめど、只この詞書の「唐土に

て月を見てよめる」といふぞしかるべき。帰

らんとて海づらに出て留ワカレタシム 別ワカレタシム によるにて

は、さる心なし。

〔頭注〕ふりさけ見るとは万葉に振放などの字をかりて遠くはなれて  
見るをいふ。

### 喜撰法師

〔七・オ〕

8わが庵は都のたつみしかぞすむ世をうち山と人はいふなり

古今雑下、題しらず。歌の心は、わが庵はやがて

都の辰巳にて近きわたりなるに、かく住居る

を何ぞや、わがこの世をうしとて遁れ住

やうに世をうち山と人はいふなり、とても世を

遁る、位ならば吉野の奥などにこそ住べ

けれ、かゝる都近き所に住べしやとなるべし。

辰巳とは只近きをいふのみ。「しかぞすむ」は、か

くぞすむと云が如し。この歌、諸注まちく

にて古今集の序にも、はじめをわりたしか

ならず、といはれたれば、かゝるべし。百首

異見の説おだやかなるべけれど、「人はいふ也」

の結句いかにもこゝろえがたきやうなれ

ば、かりそめに云なり。猶あはせ見るべし。

### 小野小町

9花の色はうつりにけりな徒にわが身世にふるながめせしまに

古今春下、題しらず。歌の心は、花のいろは

いつしかはやうつるひにけりな、わが身世にふる

習ひの物おもひに花も見ず、こもり居し

間にと也。「ながめ」は、物おもふかたち也。それ 「(八・オ)

を長雨にそへたり。「世にふる」の「ふる」も雨の

縁也。「世に経るながめ」とは、女の世をわたる

習の物おもひ所也。「うつろふ」とは花の色の

散がたになればかはるをいふ。又ちるをも

いへど、こゝは色とあればかはる方なるべし。

「けりな」の「な」は、いひおさへる詞。

### 蟬丸

10 これやこの行も帰るも別れてはしるもしらぬも逢坂の関

後撰雜一、あふ坂の関に庵室をつくりて

住待るに行かふ人を見て、とあり。三の句

此集ならびに素性集にも、「別れつ」と有

ぞしかるべき。歌の心は、これやこの、かねて

名に聞し逢坂の関なるてふことを行

人も帰る人もこゝにて別れつ、しる人もし

らぬ人もこゝにて逢ふといひくだせしなり。

かねて聞し逢坂とはこれやこのゆゑ

の名也といふ意なるべし。「うべ山風を

あらしてふらん」などに聊似たる趣有。

或云、この歌は旅行人の逢坂の関にて

よめりしならんと。げにさる歌なるべし。

庵室を作りて云しにては、歌の心いかに

とも解がたし。この詞書疑がふべし。

「これやこの」とは兼て聞しを今見て

いふにあらざればかなはず。これぞ彼と

云におなじ詞なり。

### 参議篁

11 和田の原八十島かけて漕出ぬと人には告よ海士の釣舟

古今羈旅、おきの国に流されける時舟に

乗て出たつとて京なる人のもとに遣し

ける、と有。歌の心は行々おほくの島々を

かけて漕出たりと京なるおもふ人に告よ、

こゝに釣する舟人、と也。和田の原は海原な

り。八十島とは行先にある数多の島をさ

していふ也。言伝すべき人もあらんに

蟹の釣舟にあつらへたるがあはれ也。これ

歌の妙なり。

僧正遍照

12 天つかぜ雲のかよひ路吹とちよ乙女の姿しばしとゞめん

古今雑上、五節の舞姫を見てよめる、と有。

空吹風よ、今天にのぼるべきをとめがか  
「(一〇・オ)

よひ路を吹とぢめてやるな。その間をだに

しばしとゞめて見んと也。むかし吉野の宮

に天女の天降て舞しより禁中にて

五節の舞姫はじまりたりといふ

につきて、今も即て天女と見なして

舞はてたる入あやをあかずをしみ

たる意なり。

陽成院

13 つくばねの峯よりおつるみなの河恋そつもりて淵と成ぬる

後撰恋三、釣殿のみこにつかはしける、と有。  
「(一〇・ウ)

御歌のこゝろは筑波山の高峯よりたえ

だえしたゝりおつるみなの川の流もすゑ

終に淵となるに忍び給ふ御思のつもりつ

もりていと深くなりぬるになぞらへ給へ

る也。或云、こひとはいへるは水の事をもいへれ

ば、かくつゞけ給へるなるべし。六帖に此御

製を「恋ぞたまりて」とあるも水の縁にて

「たまる」といひしなるべしと、げにさるこ

ともあるべし。

河原左大臣

「(一一・オ)

14 みちのくの忍ぶもぢずり誰ゆゑに乱初にし我ならなくに

古今恋四、題しらず。四句「みだれんとおもふ」と

あり。今は伊勢物語によられしなるべし。

上句序なり。乱んと云料のみ。歌のこゝろは

かく契りかためし心はいかなる誰人故なり

とも、乱んなどおもふ我にはあらぬをと也。

こは先より疑ひたるにかけてよめる成べ

し。陸奥よりしのお草の形をすりたる

布帛を出す故に、「みちのくのしのお」と

つゞけ、又「もぢ摺」とは其すりたる形もつれ  
「(一一・ウ)

乱れたるをいふ。此説、諸注いと多し。こと

長ければ略つ。



光孝天皇

15 君がため春の野に出てわかなつむ我衣手に雪は降つ、

古今春上、仁和の帝みこにおはしましける時

人にわか葉給ひける御製、とあり。君にまる

らせんとて、けふしも野に出てわか葉つむ

袖に雪の降かゝれると也。「つ、」は前の「露にぬれ

つ、」におなじ。そのわかな賜ふにつきてかく

よませ給へるにて御手づから摘せ給へるには 「(一二・オ)

あらねど、かくよませ給ひてそへ給へるが

歌の常なり。

中納言行平

16 立わかれいなはの山の峯におふるまつときかば今帰りこん

古今離別、題しらず。歌の心は、かくたち

わかれ行とも待とだに聞かば只今即て帰

り来んと也。別れいぬるといふを今ゆく先

の因幡山にかけ、即てその山の峯におふると

いひ、松を待のことばにいひよせたるさま後

の世の歌ざまに似たれど結句に「今 「(一二・ウ)

帰りこん」といひすてたるぞ、後の世の

歌の及ばざる所なるべし。此卿因幡守に

なりて赴き給ふとき、人にわかるゝうた

なるべし。

在原業平

17 千早振神代もきかず立田川から紅に水くゝるとは

古今秋下、二条の後の東宮の御息所と申

ける時御屏風に龍田川に紅葉流したる

形をかけりけるを題にてよめる、とあり。歌

の心はながるゝ水をかくゆはた染にくゝり 「(二三・オ)

なすは奇異あやしきのこのみありしといふ神代

にも例いまだ聞かざる事也。こはいかだ

かくと怪しみたるに興ずる意あり。「千

早振」は枕詞也。「くゝる」は絞にて糸もて所々

くゝりて染る也。今いふしほり染に同じ。

水の緑なるに紅葉のくれなゐなる所々

にうかひたるさまを絞染に見なしてなり。

藤原敏行朝臣

18 住の江の岸による浪よるさへや夢の通ひ路人めよくらん

古今恋二、寛平の御時后の宮の歌合の  
「(一三・ウ)

歌、とあり。序歌也。歌の心はつねにはさ  
もあるべきに、夜の夢の通ひ路にさへ人  
目をよけはゞかるらんとあまりなること、  
みづから歎きたる也。上は只「よるさへ」といは  
ん料のみ。「さへや」は下の「通ひぢにさへや」とま  
はして心得べし。

### 伊勢

19 難波がた短きあしのふしの間もあはで此世をすぐしてよとや

新古今恋一、題しらず。歌の心は難波江に

おふる声のその短きふしの間ばかりも終に  
「(一四・オ)

逢ずして、此世をすぐしはてねとのこ、

ろなるにや。あまりのことぞと難面を恨

みたるなり。「このよ」の「よ」も声の縁にて節也。

### 元良親王

20 侘ぬれば今はたおなじ難波なる身をつくしてもあはんとぞ思ふ

後撰恋五、事いできてのちに京極の御息所

につかはしける、とあり。歌のこゝろはかく侘て

のみをれば今はた事ありし時の物おもひに

おなじ。とてもかく同じからんには猶身を

捨て逢んとぞおもふとなり。三の句「難波の  
「(二四・ウ)

濡標ぬすぢ」にいひよせて「身を尽しても」といふ也。

「はた」は、かれとこれとをつらねていふ間に

いふ詞なり。

### 素性法師

21 今こんといひしばかりに長月の在明の月を待出つるかな

古今恋四、題しらず。歌の心は即て来んと

いひたのませて別れし一言にはかられて時

しも長月の有明の月の出るまでいたづらに

待ふかしつるかなと也。さてその人ならで月

をまちいでんとは思ひかけざりけるよと  
「(二五・オ)

打なげきたるなり。初句朝の別れに暮

なば又そのまゝ、こんとたのめしこゝろ也。

### 文屋康秀

22 吹うからちに秋の草木のしをるればうべ山風をあらしといふらん

古今秋下、新撰万葉に、打吹丹秋之草木之

芝折禮者郁子山風緒荒之云濫シヨルレバウベヤマカセヲアラシテララシとあり。

歌の意は、吹たつまゝにかく草木のしをるれば、うべ也、山の風をあらしといふことはとなり。このけしきを見て風の名を了悟

せしこゝろ也。「うべ」は諸の字を該てこゝろに」（一五・ウ）

うけがふ意の詞也。「あらし」とは物を吹あらすなど云あらすのこゝろにて荒きものと云にはあらず。

と云にはあらず。

### 大江千里

23月みれば千々に物こそ悲しけれ我身ひとつの秋にはあらねど

古今秋上。歌の心は月をし見ればいろ／＼ととりあつめて物悲し。さるは天の下の秋にて

わが身にばかり来たる秋ならぬを我身

ばかりに来しかと思はると也。

### 菅家

24此たびはぬさもとりあへず手向山紅葉の錦神のまに／＼

古今羈旅、朱雀院奈良におはしまし

ける時手向山にてよみ侍ける、とあり。歌の心は、

「（一六・オ）

いつはあれど此度は紅葉の盛なれば幣ぬせも

其ま、即て紅葉の錦を手向まゐらす。いづ

れなりとも神の御心のまゝにとりうけ給

へと也。幣も其俣とりあへず手むくと

つゞけて心得べし。今の俗にも、とりあへず

とは直ただに其俣など云が如し。とりあへず

答へする、又とりあへず賞翫いたすなど

「（二六・ウ）

常にいふ詞におなじ。古今に、さかさまに年

もゆかなんとりもあへず云々のとりも

あへずも、おなじ意也。「まに／＼」は今こゝろ

まゝになどいふまゝにおなじ。

### 三条右大臣

25名にしおはゞ逢坂山のさねかづら人にしられてくるよしもがな

後撰恋三、女のもとにつかはしける、と有。歌の

こゝろは「逢さか」といひ、「さ寝」といふ名におはゞ、

人にしられず忍びてくるよしもあれか

しとなり。「かな」は、かもじ濁りて願ふ意有。 「（二七・オ）

「しられで」には、かづらの縁なし。只「くる」と云

にのみ「さねかづら」は五味子、俗に鬢かづらとて

髪につくるものなり。其蔓<sup>つる</sup>を手して繰<sup>く</sup>

わざのあれば、「来る」とつゞけたる也。さて此物

いにしへ逢坂山より出しにや。今しるべから

ずといへどもさもなくては「あふ坂のさねか

づら」とはつゞけがたかるべし。「名にしおはゞ」

の詞も心得がたし。もし逢坂山にとりし葛<sup>かづら</sup>

を女のもとにおくれるにそへて遣し、歌

ならば聞ゆべし。おぼつかなきまゝに云。

「(一七・ウ)

### 貞信公

26をぐら山峰の紅葉ば心あらば今一度のみゆきまたなん

拾遺雑秋、亭子院大井川に御幸ありて

行幸もありぬべき所なりとおほせ給ふに

事のよし奏<sup>せ</sup>んと申て、とあり。歌の意は

小倉山の紅葉よ、汝、心あらばけふのまゝに散

失ずして再びの行幸をまでよと也。

詞書を合せて歌の心明らけし。

「(二八・オ)

新古今恋一、題しらず。序歌なり。上は「いつ見

き」といはん料也。いつ見しこともなきを聞

わたりたるばかりにいかでかく恋しきことぞ

と自ら咎めたる意あり。「わきて」とは泉は

涌ものなれば「わきてながる、泉川」とつゞけたり。

### 源宗于朝臣

28山里は冬ぞさびさまさりける人めも草もかれぬと思へば

古今冬、ふゆの歌とてとよめる、と有。歌の

こゝろは山里のさびしさはいつしもあれど、冬

こそことにまされ、人め<sup>は</sup>もとよりにて千

「(二八・ウ)

ぐさも皆枯ぬとおもへばと也。「枯ぬれば」と

いふを「おもへば」といふはひとつの様なり。

### 凡河内躬恒

29心あてにをらばやをらむ初霜のおきまどはせる白菊の花

古今秋下、しら菊の花をよめる、とあり。歌の

こゝろは、初霜<sup>はつしも</sup>のおきわたし人をまどはし

てそれとも見わかぬばかりなれば、只押<sup>し</sup>

### 中納言兼輔

27みかの原わきてながる、泉川いつみきとてか恋しかるらん

はかりにをらば折てんや。これぞ白菊の  
花とさだめては折がたしと也。

壬生忠岑

「(一九・オ)

30 在明のつれなく見えし別より暁ばかり憂き物はなし

古今恋三、題しらず。歌のこゝろは人のつれ  
なくて徒らに帰りし暁空のけしきさへいと  
こゝろづきなきこゝちせられし別より心に  
おもひしみて今はよに暁はどうきものは  
なしとなり。在明の月は、夜明ぬれど猶  
面つよくさりげなきさまにてあるものなれ  
ば、つれなくの枕詞のやうにおきて、さて  
下に暁とはいへるなり。

坂上是則

「(一九・ウ)

31 朝ぼらけ在明の月と見るまでに吉野の里にふれる白雪

古今冬、大和国にまかれりける時に雪の  
降けるを見てよめる、とあり。歌の心あきら  
けし。「朝ぼらけ」は、朝ほのぐ明の意なり。  
「見るまでに」は、見まごはるゝばかりに也。

春道列樹

32 山河にかぜのかけたる柵はながれもあへぬ紅葉也けり

古今秋下、志賀の山越にてよめる、と有。この  
「山川に風のかけたるしがらみ」は何なればなが  
れかねてとゞこほりたる紅葉の落葉也  
けりと也。柵はもと人のかけて水をせく物  
なるを、今は風の吹かけたるなれば、かくは  
いふなり。それは何ればかく也けりといふは  
歌のひとつの様なり。

「(二〇・オ)

紀友則

33 久かたの光のどけき春の日にしづ心なく花のちるらむ

古今春下、さくらの花のちるを見てよめる、  
とあり。歌の心は、かばかり長閑き春の日に  
いかでかく心あわたゞしげに花のちるらん、  
となり。「久方」は天の枕詞なるを後には打  
まかせて天のことにもいふ也。二三の句にか、  
れり。「しづ心なく」は静に長閑き心なく也。  
「しづこゝろ」と「こゝもじ濁るべし」。

「(二〇・ウ)

藤原興風

34 誰をかもしる人にせん高砂の松もむかしの友ならなくに

古今雑上、題しらず。歌の心は、今は誰をか

相識<sup>あひしよ</sup>人にせん、高砂の松はおのれと共に老た

るものなれど、昔よりの友ならず、さらば誰

も知る<sup>知り</sup>人のなきと老をわびてよめる也。「なら

なくに」は、ならぬを延て「に」とおさへたる詞

「(二一・オ)

なり。「高砂」は此頃に至りてはたゞ山のこと

にいふめり。

紀貫之

35 人はいさ心もしらず故郷は花ぞむかしの香に匂ひける

古今春上、はつせにまうづるごとにやどり

ける人の家に久しくやどりて<sup>ママ</sup>ほどへて後

にいたれりければかの家のあるじかくさだ

かになんやどりはあるといひ出して侍り

ければそこにたてりける梅の花を折て

よめる、と有。歌の心は、さはの給へど人の心は

「(二一・ウ)

いかゞあらんか知らず、わがなれしこの宿は

梅の花ぞ昔のまゝにかはらで香に、ほひ

けるよと也。もと宿りし家なれば、故郷と

いへるなり。「いさ」は不知といふ詞にて重ね

ては「いさしらず」共云也。こゝは人のこゝろはいさ

しらずと云を、詞につきてかくはつゞけたる

なり。詞書の「さだかになんやどりはある」と

は、もと宿り給ひしいへの今もかくさだか

にかはらずあるを、よそにのみ過ぎ給へると

あてはみていへるに、「人はいさ」云々とその 「(二一・オ)

詞にあたりてよめるなり。

〔頭注〕人はいさ、俗言にいはゞ、こゝにては人はどふしやう心もし  
らず花ぞとうけていふ意也。

清原深養父

36 夏の夜はまだよひながら明ぬるを雲のいづこに月やどるらん

古今夏、月のおもしろかりける夜暁がた

によめる、とあり。歌の心は、夏の夜のいとも

みじかくてまだ宵の間に明わたりぬる



を猶中空に照月は雲の何所にかかくれ

宿るらんと也。夜もすがら月にうかれて

涼み明したるさまにて、扱夜明れば月は

出てはあらぬもの、やうに、ふとおもひ

なさる、うちつけの情を、はかなくよみ

出たるなり。「雲のいづこ」は空のいづこといふ

におなじ。詞書に歌のこゝろ合せ見るべし。

「(二三・ウ)

参議等

ほしくも悲しくもある哉と也。

39 浅茅生のをの、篠原しのぶれどあまりてなどか人の恋しき

後撰恋一、人につかはしける、とあり。序歌也。

人にもとぞして忍びぬれど、猶も心にあふ

れてなどかかくまで恋しきことぞと也。恋し

きもほどこそあらめ、今は色にもあらはれ

てあまりなることよと自らとがめたる意

あり。「しの原」は篠薄の生たる原也。上の句

はたゞ忍ぶといはん料のみ。

「(二三・ウ)

文屋朝康

37 しら露に風の吹しく秋の野はつらぬきとめぬ玉ぞ散ける

後撰秋中、歌の心明けし。「吹しく」は、吹し

きるにて、頬シキリに吹なり。玉は緒して貫く物

なればかくはよめり。

平兼盛

40 しのぶれど色に出にけりわが恋は物やおもふと人のとふまで

拾遺恋一、天曆の御時歌合に、とあり。歌

の心は物をおもふやと人にとはれてわが恋

はかく人の問ふばかりに色に出にけりな、さ

しも忍ぶとすれど、うち歎き驚たる心也。

右近

38 わすらる、身をばおもはず誓ひてし人の命のをしくもあるかな

「(二三・オ)

拾遺恋四、題しらず。歌の心は、わが身のわす

らる、なげきはおもはず、変らば即ていのち

うせんと神かけてちかひつる人の上のいと

壬生忠見

「(二四・オ)

41 恋すてふわが名はまだき立にけり人しれずこそおもひそめしか

拾遺恋一、詞書、前におなじ。わが恋するといふ

名はいとはやくも立にけりな、心のうちに

こそおもひ初しものを、いかでかく人にしら

れけるよとあやしみ歎きたるなり。「まだ

き」は、早くといふが如し。「人しれず」は人に

しられずといふにおなじ。

清原元輔

42 ちぎりきなかたみに袖をしほりつ、末の松山波こさじとは

後拾遺恋四、心かはりて侍りける女に人  
「(二四・ウ)

かはりて、とあり。歌の心は思かはせし時は

互に打泣つ、いかに成行世なりともかはら

じとは契りしや契らずやおほめきて

とひかけたるやうにいひて、さて下の心はさ

ばかり契りしものを今更かくかはり

たるはと、とがめていふ也。「末の松山波こさじ」は

誓ふ時の詞也。松山は陸奥にありて海辺

ながら必浪のこゆまじき山をとり出て

いふ也。この山に浪こえばこそあらめ、浪の

こえぬ世には心かはらじと誓ふなり。  
「(二五・オ)

中納言敦忠

43 逢見ての後の心にくらぶれば昔は物をおもはざりけり

拾遺恋二、題しらず。歌の心は、逢ざりし

ほどの物思ひのくるしかりしを今逢見

て後の物おもひにくらべぬれば逢ざりし

前の物をもひは数ならずといふを「むかしは

ものをおもはざりけり」とつよくいへる也。

中納言朝忠

44 あふことの絶てしなくは中くくに人をも身をも恨みざらまし

拾遺恋一、天曆の御時歌合に、とあり。歌の  
「(二五・ウ)

こゝろは、あふことの絶てなき中ならば中

く恨ることもなかるべきに、なまじひに

稀にも逢中にて、さてうきふしのまじ

れ、ば人をも身をも恨むなり。一向に逢

ことのなくは結句「うらみざらん」といふ也。

恨にあまりせまりたる時の情なり。

謙徳公

45 あはれともいふべき人はおもほへで身のいたづらに成ぬべき哉

拾遺恋五、ものいひける女の後につれなく

なりてさらにあはず侍りければ、とあり。歌 「(二六・オ)

の心は、かくつれなきにおもひわびてわが身

徒らに死ぬべきをあはれともいひ歎かん

ずる人はつれなくなれば、今はあはれと

いふべくもおもはれずして、いたづらに云々

となり。「身のいたづらになる」とは、かひなき

死をとぐるをいふ。

曾祢好忠

46 由良のとをわたる船人かちをたえ行へもしらぬ恋の道哉

新古今恋一、題しらず。序歌なり。歌の心は、

行方へいかゞ成るらんもはかりしれぬは恋の 「(二六・ウ)

道なり、と也。由良のみなどは難所なる上に

命と頼む楫の打絶ぬれば、行方しれぬ

序とせり。「たえ」は「をり」といはんが如し。

〔頭注〕由良のとの「と」は門にて、水門といふにおなじ。

惠慶法師

47 八重葎しげれる宿のさびしきに人こそ見えぬ秋はきにけり

拾遺秋上、河原院にてあれたる宿に秋来

たるといふ心を人々よみ侍りけるに、とあり。

河原院は六条にありて、昔融の大臣の別

館也。歌の心は、むぐら茂りて荒たる宿

の淋しきに人こそとはね、秋は来にけり、 「(二七・オ)

となり。人は来たらねども、さすがに秋は

来にけりといへるのみなるべし。「秋はきに

けり」といふにていと淋しきさま、言外に

あり。此歌、後六々撰には「人こそとはね」

云々と有。見えねもとはねといふにおなじ。

今の俗にも人の来ぬことを見えずと

いふは古言の残れる也。『異見』の説、昔の

人こそ見えねむかしのまゝに秋のみ来

たりけりといへど、河原院といふより心に

むかへて昔といへるにて昔といふこと、 「(二七・ウ)

歌のうへに見えぬなり。

源重之

48 風をいたみ岩うつ浪のおのれのみ碎て物を思ふ比かな

詞花恋上、冷泉院の東宮と申ける時百首

の歌奉りけるによめる、とあり。序歌なり。

歌の心は、人はつれなきに我のみ心くだけ

て物をおもふと也。一二の句は風をつよくおこり

ていと高くうちよする波の岩にふれて

くだくるを「おのれのみ」云々の序とせり。

されど岩をつれなき人によそへ、浪をわが

胸にたとへたる意あり。序中のたくみに

て此時代の比の習なり。

「(二八・オ)

藤原義孝

50 君がためをしからざりし命さへながくもがなとおもひける哉

後拾遺恋二、女のもとより帰りてつかはし

ける、とあり。君がためには露をしからじと

おもひし命さへ一度逢見てよりおなじ

命の又ながくもあれかしと思ひけるかな、

にて同じ人故に、をしからざる命のまた

をしまるゝを、みづからあやしむ意なり。

藤原実方朝臣

51 かくとだにえやはいぶきのさしも草さしもしらじなもゆるおもひは

後拾遺恋二、女にはじめていひつかはしける、と

「(二九・オ)

大中臣能宣朝臣

49 御垣守衛士のたく火の夜はもえて昼はきえつ、物こそおもへ

詞花恋上、題しらず。序歌也。歌の心は夜も

すがら胸のもへわたり、日ねもす心のきえ

かへりて物おもふと也。一二の句、衛士は宮衛に

て御垣を守りて火を焚なれば「よるはも

へ」の序とせり。集には「よるはもえ」と有。

「(二八・ウ)

俗に、さくともと云に同じ。

藤原道信朝臣

52 明ぬればくる、ものとはしりながら猶うらめしき朝ぼらけ哉

「(二九・ウ)

後拾遺恋二、女のもとより帰りてつかはしける、

とあり。かく明れば又暮る、ものとしりて

居ながらなり。暮るれば又あふべきを、そ

れ猶(マ)でもうらめしきこの朝のわかれかな

といふ也。帰りて後に遣しけれど歌の心は

朝の別の時の心をよめりと見るべし。

右大将道綱母

53 歎つ、ひとりぬる夜の明るまはいかに久しきものとかはしる

拾遺恋四、入道撰政まかりたりけるに門を

おそく明ければ立わづらひぬといひて入て

侍りければよみて出しける、とあり。歌の心は

今よひもいかにやくと侘なげきつ、独寝る

夜なくの明ゆくほどはいかばかり久しき

ものとしり給へるやと也。門あくる間をだに

「(三〇・オ)

かくの給ふ御心にくらべ給へと也。

儀同三司母

54 わすれじの行末まではかたければ今日をかぎりの命ともがな

新古今恋三、中関白かよひそめ侍りける

ころ、とあり。「忘れじ」との給ふ詞の行末遠く

までたがはざらんことのかたければ、今この 「(三〇・ウ)

めづらしくうれしき今日を限りに命のうせねかしと也。

大納言公任

55 瀧の音はたへて久しく成ぬれど名こそながれて猶聞こえけれ

拾遺雑上、大覚寺に人々あまたまかりたり

けるに、ふるき滝を見てよみ侍りける、とあり。

嵯峨の大覚寺、昔嵯峨天皇滝御覧すべき

滝殿作らせ給ひし跡也。滝の音は絶て久し

けれど名高かりつる名のみ言伝へて聞ゆと

なり。上に「音」といひ、下に「聞え」といふが歌の文也。

〔頭注〕「ながれて」に、「ながらへて」の意あり。

和泉式部

56 あらざらん此世のほかのおもひ出に今一度のあふよしもがな

「(三二・オ)

後拾遺恋三、こゝち例ならず侍りけるころ

人のもとにつかはしける、とあり。世にあらざ

成なん、此世のほかまでのおもひでに今一たび

逢ふよしもあれかしと也。思ひ出とは樂し

きにまれうれしきにまれ、何にても心に

わすれず、後々までもさることのありし

よとおもひ出すがもにて、今もその事

をさしていふには一つの詞のやうに成たる也。

紫式部

57 めぐり逢て見しやそれともわかぬ間に雲がくれにし夜半の月かな

「(三二・ウ)

新古今雑上、はやくよりわらは友だちに侍り

ける人の年ごろへて行あひたるが、ほのか

にて七月十日ごろ月にきほひてかへり

侍りければ、とあり。歌の心は、もと見し月が

再び空にめぐりあひて、その見し影か

それかともたしかにわかぬ間に、はや又雲が

くれしていりにしかな、と也。下の心は年を

へてたまさか逢て昔見し其人かとも

いまだおもひわかぬ間に、又わかぬるほ

みなさを折からの月になぞらへていへる

なり。「見しやそれとも」云々に年経て面

がはりせしにほひもおのづから聞ゆべし。

「(三二・オ)

大式三位

58 有馬山いななさ、原風ふけばいでそよ人をわすれやはする

後拾遺恋二、かれぐなる男のおぼつか

くなどいひたりけるによめる、とあり。歌の

心は、おのが心ならひにかへりて人を疑ふ

にあたりて、いでそなたこそはあらめ、我や

は人をさはわするべき、といえり。「いで」は物を

「(三二・ウ)

いひおこす詞、「そよ」は、それよにて俗にそ

そうよといふに同じ。さきの詞をうけて

いふ也。上は序にて、そよといはん料のみ。笹原

の風の音はそよくと聞ゆればなり。



赤染衛門

59 やすらはで寝なまし物を小夜ふけてかたぶくまでの月を見しかな

後拾遺恋二、中関白少将に侍りける時はら

からなる人にもいひわたり侍りけるに

たのめてござりけるつとめて女にかはりてよ

める、とあり。かく来ぬとらば、まちたゆ

たはずしてはやくも寝ぬべきをたのませ

し詞をまこと、おもひて寝もせで夜

更て月のかたぶくまで見けることかな

となり。「やすらはで」は、ためらはでといふが

如し。猶予せずになり。

小式部内侍

60 大江山いく野の道の遠ければまだふみも見ず天の橋立

金葉雜上、和泉式部保昌に具して丹

後国に侍ける比都に歌合のありけるに

小式部和泉式部の子歌よみにとられ侍りけるを

中納言定頼つぼねのかたにまうで来て

歌はいかゞせさせ給ふ、丹後へ人はつかはして

けんや、使まうでこずや、いかに心もとなく

「(三三三・ウ)

伊勢大輔

61 いにしへの奈良の都の八重桜けふ九重に匂ひぬる哉 (三四・ウ)

詞花春、一条院の御時奈良の八重桜を

人の奉りけるを其をり御前に侍りければ

おぼすらんなどたはぶれて立けるを引

とゞめてよめる、とあり。歌のおもては、丹後

なる大江山、生野などを経て行道の遠

ければ、いまだ踏見かみず、天の橋立、と也。下の

心は、丹後へ人つかはしけんや使まうで

こずやいかに云々と問かけしに受て人を

つかはすにも使のまうでくるにも道の遠く

して早速の間にあはねば、いまだ母の文

も見ずとなり。定頼の詞はこの度の歌

合の歌はさぞ母の式部にあつらへたらん

に其便りいまだなくはさぞ心もとなく

おぼすらんと誠のうちにくき意あれ

ば受てよめる也。「文も見ず」を「踏も見ず」

といふによせて、橋とはいへるなり。扱橋立

はすなはち母の住ほとりなれば、かくつゞけたる也。

(三四・オ)

其花を題にて歌よめと仰ごとありければ、  
とあり。歌の心は、古の八重桜がけふしも  
又この九重に再び匂ひぬるかなと也。九重は  
禁中をいふ。八重といひ九重といふが秀句也。

### 清少納言

62 夜をこめて鳥のそらねははかるともよに逢坂の関はゆるさじ

後拾遺雜二、大納言行成物がたりなどし

て侍りけるに内の御物忌にこもればとていそぎ (三五・オ)

帰りてつとめて鳥の声にもよほされてと

いひおこせて侍りければ、夜ふか、りける

鳥の声は函谷関の事にやといひつかはし

たりけるを、立かへり是はあふ坂の関に

侍るとあればよめる、とあり。歌の心はまだ

夜ぶかきに夜明ぬるといつはる鳥の空

音はよくはかるとも、此逢坂の関をば開

んや、さらにゆるすまじ、といふ也。「よに」とは、

その事をつよくいふ時の詞にて、「よにたの

もしく」又「よにうらめしげに」などいふに (三五・ウ)

おなじ。こゝにては俗に決してなどいふが如し。

逢坂に人にあふことをこめたり。函谷関  
はさもあるべけれど、このあふ坂の関は  
偽りなどにては決してゆるさじ、といふ也。

### 左京大夫道雅

63 今はたゞおもひ絶なんとばかりを人づてならでいふよしもがな

後拾遺恋三、伊勢の齋宮わたりより

登りて侍りける人に忍びてかよひけること

をおほやけにも聞こしめして守り目など

つけさせ給ひて忍びにもかよはずなりに (三六・オ)

ければよみ侍りける、とあり。歌の心は、いはま

ほしき事はおほかれど、今はせんかたなけれ

ば、只思ひたえなんといふ一言ばかりもまの

あたりにいふよしもあれかしと願へるなり。

### 権中納言定頼

64 朝ぼらけ宇治の川ぎりたえぐにあらはれわたる瀬々の網代木

千載冬、宇治にまかりて侍りける時よめる、

とあり。歌の心は、山川の興ある里のあさ

あけに見わたせばやうくたえぐに成行

きりのひまより瀬々にかまへたる網代  
(三六・ウ)

木のあらはれ出て見やるさま、あはれにもおかしくも見ゆるをよめる也。網代は網のかはりに簀もてしきりて氷魚をとる也。其かまへに立る木なれば、網代木とはいふ也。

相模

65 うらみわびほさぬ袖だにあるものを恋に朽なん名社をしけれ

後拾遺恋四、永承六年内裏歌合に、と有。

うらみ侘てほしあへず朽る袖だにあるを、

又さらに恋に朽果なん名のをしきといふ  
(三七・オ)

なり。袖ばかりだにねたくもあるに、まして名の世にながれくたさんことのいとも

口をしけれ、となり。

大僧正行尊

66 もろともにあはれとおもへ山桜花より外にしる人はなし

金葉集雑上、大峯にて思ひがけず桜の

咲たりけるを見てよめる、とあり。歌の心は、

わがおもふごとく花も我をあはれと思へよ、

汝より外に相知る人もなき身なれば、と也。

己が世におくれて今は知己の友もなきを  
(三七・ウ)

花も時におくれて大峯なれば、四月の

頃に独り咲残りたるを、わが身のたぐひ

に云なせるなり。

周防内侍

67 春の夜の夢ばかりなる手枕にかひなくた、ん名こそをしけれ

千載集雑上、きさらぎばかり月あかき夜

二条院にて人々居あかして物がたりなどし

侍りけるによりふして枕もがたと忍びや

かにいふを聞て大納言忠家これを枕にとて

かひなをみすの下よりさし入て侍ければ  
(三八・オ)

よみ侍ける、と有。短き春の夜の夢の間ば

かりなる手枕に、さるあだ名の甲斐なくた、

んこそをしけれ、となり。肘を甲斐なく

とかくせし也。

〔頭注〕「夢ばかり」とははかなきことをいふ詞なるを、やがて「春の夜の夢」とつゞけたり。露ばかりなどいふ詞に似たり。

三条院

68 心にもあらでうき世にならへば恋しかるべき夜はの月かな

後拾遺雜一、例ならずおはしまして位など

さらんとおほしめしける比月のあか、りけるを御覽じて、とあり。かく例ならずなやま

しくおはせば、とても世にながらふまじ

(三八・ウ)

くおほしたり。又、もとより世にながくあらまほしくもおほし召されぬを、もしさる

御心にたがひて御讓位の後も思召のほ

かにながらへおはしましなば、かゝる夜のけしきをばいかばかりか恋しくおほし出らんとも

御覽ずまじき。禁中の月を今よりおほ

しおかせ給へるなり。憂世との給へるにも其御代のありさましられていとあはれ

なる御製なり。

能因法師

(三九・オ)

69 あらし吹三室の山の紅葉ばは龍田の川の錦也けり

後拾遺秋下、永承四年内裏の歌合にも

あり。歌の心明らけし。三室山は龍田川の水

上にあるをことわるのみにて必見ていふ

意にあらず。されば三室の紅葉は、龍田川の錦なりけりといふが歌のおもむき也。龍

田川もみぢ葉ながる神なびの三室の山に時雨ふるらし、又神なびの三室の岸や崩

るらん龍田の川の水の濁れる、などとして

見れば三室と龍田川は間隔りたれば

(三九・ウ)

おしはかりていふにて、今もさる意

に見えし。『異見』の見あげ見おろし云々

は誤めりといふべし。

良暹法師

70 さびしさに宿を立出ながむれば何所も同じ秋の夕昏

後拾遺秋上、題しらず。夕暮のさびしさに

わが宿を出て心なぐさむやと見たせど

も、いづこも淋しさはおなじと也。

大納言経信

71 夕されば門田の稲葉音づれて芦のまろ屋に秋風ぞ吹

金葉秋、師賢臣ウヂノの梅津の山里に人々まかり

(四〇・オ)

て田家の秋風といふことをよめる、とあり。歌の心は夕になれば、門田の稲葉そよ／＼と音なひて、芦のふせ屋に秋風吹てさびしきとなり。夕去は、うちまかせては只夕の事と心えべし。夜を夜ざりと云におなじ。

祐子内親王家紀伊

72 音に聞たかしの浜のあだ浪はかけじや袖のぬれもこそすれ

金葉恋下、堀川の御時艶書合によめる、と有。

かねて音に聞し名高きあだ人にはよも (四〇・ウ)

あはじ、其あだなる波のか、らば、袖のぬる、べければ、かけじといふ也。音に高しといふを、

高師の浜とよみおろせし也。「こそすれ」は、

前方に治定していふ詞也。「かけじや」の「や」は、かけじよといふに同じにて助辞也。

中納言匡房

73 高砂の尾上の桜さきにけり外山の霞た、ずもあら南

後拾遺春上、内のおほいまうち君の家にて

人々酒たうべて歌よみ侍りけるに遙に山の

桜を望といふことをよめる、とあり。歌のこゝろは、(四一・オ)

遠く見ゆる高峰の桜咲初にけり、今より

日々に望み見んを、前山の霞た、ずあれ

かし、前山の霞立のほらば、遠山の花を隔

つるがに、といふ也。外山は奥山にむかへていふ名

也。こは、遠山の花の咲たるにつけて、今より

前山の霞たつべからずといふ意にて、いまた

ちたる霞をいふにあらず、『異見』の説、理に

わたりたるに似たり。高砂は後の代の歌

には、只山のことをいふなり。尾上は、岳の

上にて峰をいふ。

(四一・ウ)

源俊頼朝臣

74 うかりける人をはつ瀬の山おろしはげしかれとは祈らぬものを

千載恋二、祈不逢恋といへる心を、とあり。歌

の心はつれなくはげしき人を和らげなび

け給へと祈しに、今は却てつらさのいや増れ

ば、人の心をはげしかれといのりしに似たり。

さは祈らぬものを、となり。泊瀬の山おろしは

はげしといはん序にて、やがて其序に祈る

神をさしていえる也。うかりける人を「はげし  
かれ」云々とつゞけて心得べし。  
(四二・オ)

### 藤原基俊

75いかにせん契りおきしさせもが露をいのちにてたのめし秋も暮果ぬめりあはれことしの秋もいぬめり

千載雑上、僧都光覚維摩会の講師の

請を申けるをたび／＼もれにければ法性寺

入道前の太政大臣に恨申けるをしめぢが原

と侍りけれど又その年ももれにければ、つか

はしける、とあり。光覚は興福寺の僧にて基

俊の子也。歌の心は、しめぢが原との給へる御

詞の契りをたのみてあるに、あはれ今年

の秋もそのことなくて暮ぬめりと恨みた  
(四二・ウ)

るなり。なほたのめしめぢが原のさしも草

われ世の中にあらんかぎりはいふが清水

観音の御詠也といひ伝ふ歌也。其御心

にてしめぢが原と只一句宣ひしは我世の

中にあらんかぎりは如在あらじとの御心

なれば、頼める也。「命にて」は、それをたのみ

てながらへ居る意にて、即、頼にてと云が

如し。扱させもが露をたのみてとは、艾の

露といふに御恵みの心をこめたるべし。

させもは、さしも艸といふに同じく云便也。  
(四三・オ)

しめぢが原は標茅原にて、曠野のこと也。

さる野原に艾は生ふるものゆゑに、かくつゞ

けたる也。標茅の説いと長ければ略つ。此歌

『袖中抄』には初句「いかにせん」下の句「たのめし

秋も暮はてぬめり」とあるぞ、歌のこゝろ

聞えやすく姿もよろしかるべし。

### 法性寺入道前関白太政大臣

76わたの原漕出て見れば久方の雲井にまがふ奥津しら浪

詞花雑下、海上遠望といふことをよめる、と有。

海原遠く見渡せば限りなき空のみどり  
(四三・ウ)

に沖津しら浪の立つゞき、空も浪もひとつに

つらなりたる也。「まがふ」は混する意也。

### 崇徳院

77瀬行なやみをなやみはなやみやみ岩にせかる、滝川たきのわれたても末にあはんとぞ思ふ

詞花恋上、題しらず。御製の心は滝川の

瀬がはやさに、行水の岩にせかれわかれて又末にあふ

ものなれば、上句は「われても末に」云々の序也。

「われても」は、今の俗にいふ打出して又打われ

てなどいふが如く、つゝみかくすことも今はと

せまりては何事にもかへり見ずに打われて

いひ出すといふが如し。されば今こそあれ

末には打われ、是非ともあはんとなり。此御

製、久安百首に、行なやみ岩にせかるゝ谷川

のわれて末にも逢はんとぞおもふとあり。

これぞ正しかるべき。こゝろ少しがへ

れど爰にいはず。

源兼昌

78 淡路嶋通ふ千どりの鳴こゑにいくよね覚ぬすまの関守

金葉冬、関路千鳥といへることをよめる、と有。

すまの関に向へる淡路島へ行通ふ千鳥の声

に幾夜か寝覚ぬる須磨の関守よ、となり。

この歌、『異見』の説、鑿るに似たり。別に云べし。

左京大夫頭輔

79 秋風に棚引雲の絶間よりもれ出る月の影のさやけき

新古今秋上、崇徳院に百首歌奉りける時、

とあり。秋かせになびきて是はやき雲の

絶間より、ふともれいでたる月の影はいつしも

あれど、ことさらにさやけきと也。げに見る心

地す。『久安百首』に、二の句、「たゞよふ雲」とある

ぞ正しかるべき。「たゞよふ雲」は秋かせに吹たゞ

よはず、村雲なり。

待賢門院堀川

80 長からん心もしらず黒髪のみだれて今朝は物をこそおもへ

千載恋三、恋の心をよめると有。後朝の心也。

人の心の長からんか、みじかゝらんかもしらずして、

逢見し名残にけさしもみだれて物を思ふ

と打歎きたる也。朝の黒髪を即て、乱て

の枕詞とせり。長といふも髪縁也。『久安百

首』に初句「長からぬ」とあるぞ正しかるべき。

人の心は長からぬものともしらず也。

(四五・ウ)

後徳大寺左大臣

81ほと、ぎす鳴つる方をながむればたゞ有明の月ぞ残れる

千載夏、暁聞郭公いふ心を読み侍ける、と

有。歌の心明らけし。

道因法師

82思ひわびさても命はあるものをうきにたへぬは涙也けり

千載恋三、題しらず。かゝる物おもひのせんかた

なさにも、それでも命は堪てありふる物を

えも堪忍ばぬものは泪なりけりといふ也。命

は堪ぬれど泪はえも堪ずしておつるとなり。

(四六・オ)

皇太后宮大夫俊成

83世の中よ道こそなけれおもひ入山のおくにも鹿ぞ鳴なる

千載雑中、述懐百首の歌の中に鹿の歌とて

よめる、と有。こは、世の中をいかゞはせん、のがるべ

き道こそなけれ、さしも思ひ入ぬる山の

おくにさへ猶うきことのおればにや。悲しき

声に鹿ぞ鳴なるといふ也。「おもひ入」の入るを

山にいひくだせし也。「世の中よ」の「よ」は、一句

にていひはなちて歎く意あり。扱のがるべ

き道こそなけれ、いかゞはすべきとうめき

たるさまなり。

(四六・ウ)

〔頭注〕「おもひ入」とは俗に思ひ込むなどいふ如し。

藤原清輔朝臣

84ながらへば又此ごろや忍はれんうしと見し世ぞ今は恋しき

新古今雑下、題しらず。家の集には、いにしへ

おもひ出られる頃云々とあり。歌の心は、かく

ても世にながらへば、猶このうへいかなるよにかあ

ひてかくうしと思ふ此頃の世をも又うしと

見つる世の今かへりて恋しきをもて思へ

ばと也。保元、平治の乱し世の頃なるべし。

俊恵法師

(四七・オ)

85よもすがら物おもふ頃は明やらで闇のひまさへつれなかりけり

千載恋二、恋の歌とてよめる、と有。夜もす

がら寝もやらで物おもへば、夜のはや明けねと

思ふに人にもあらぬ闇のすきまもえしらま

ねばこれさへつれなしと聞までうらみたる



意なり。閨のひまさへつれなしといふは、上の句

人のつれなさに、物おもふはしられたり。

西行法師

86 なげ、とて月やは物をおもはするかこち貞なる我泪かな

千載恋五、月前の恋といふ心をよめる、と有。 (四七・ウ)

月は我になげ、と照らして物をおもは

するや、さはあらぬを、わがこゝろに物を

思へば見るものにつけてかこつけがまし

くおつるわが涙かなと也。かこちがほの説

まち／＼にて事長ければ、略きぬ。俗に云、

それにかづけ、これにかづけ、などいふ詞に

似たり。実はさもあらぬをうはべに

それをかりて、するやうの意なり。こゝ、

は月はなげ、とて照らすにあらぬを

其月に託してわがおもひの泪をおとす (四八・オ)

意なるべし。かほとは、かこちがましきな

どいふに似たり。かこちぶり、かこちめく、な

どいはんが如し。

〔頭注〕真淵云、かこちは仮託なり。

寂蓮法師

87 むら雨の露もまだひぬ槇の葉に霧立のぼる秋の夕暮

新古今秋下、一とほりすぎたる雨のその露

も、まだかわかぬ槇の葉にまた霧立のぼる秋

の夕ぐれと也。奥山の秋色のさまり。かわか

ぬ間を槇の葉にいひくだせり。

皇嘉門院別當

(四八・ウ)

88 難波江のあしのかりねの一よゆ糸身を尽してや恋わたるべき

千載恋三、旅宿逢恋といへる心をよめる、と

あり。歌の心は、かりそめぶしの一夜ゆゑ

にわが身をつくるまでや恋わたるべきと

なり。又逢まじきわかれのかなしさをもて、

後の事までをあらましにいえるなり。一・二

の句は、かりねといはん序也。みをつくし

も水標の寄なり。一よも芦の縁也。契沖

云、あしのかりねは蘆をかりたる根に猶

一ふしの残れるを、假寝の一夜とそへたり

といへり。いかにや。

(四九・オ)

式子内親王

89 玉の緒よ絶たばたえねながらへば忍る事のよわりもぞする

新古今恋一、忍恋のこゝろを、と有。いかにわが玉

の緒よ、とても絶たんとならば、早くもたえ

ね、猶かくてながらへあらば、もし忍ぶ心の

よわりてつゝ、む思ひの世にもれもぞする、

と也。玉の緒は命をいふ也。

殷富門院大輔

90 見せばやなをじまの蚕この袖だにも濡ぬにぞぬれし色はかはらず

(四九・ウ)

千載恋四、恋の歌とてよめる、と有。松島なる

小島の蚕この袖といへども、ひたすら濡ぬか

へるのみにて、かくは紅べにに色はかはらず、

いかで涙のほどを君に見せばや、といへる

なり。「な」はいひおさふる詞。

後京極攝政前太政大臣

91 きりぐす鳴や霜夜のさむしろに衣かたしき独かもねん

新古今秋下、きりぐす鳴てさむき霜夜

の床の狭筵せうぜんに袖そでをり敷して独ひとりまる寝ねや

せんとなげきし也。恋の歌に似たり。

(五〇・オ)

二条院讃岐

92 わが袖は汐干に見えぬ沖うきの石いしの人こそしらねかわくまもなし

千載恋二、寄石恋といへる心を、と有。忍しのびに

ぬらすわが袖は沖うき中に沈しづみて汐干しほひにも

あらはれ出でざる石いしのごとく人ひとこそはえし

らね、常つねにかわく間まもなしと也。袖そでを沖うきの

石いしになぞらへてよめる也。このうたのこと

別わかにいへり。

鎌倉右大臣

93 世よの中ちかは常つねにもがもな渚しづこぐ蟹かにの小舟こぶねの綱つなでかなしも(五〇・オ)

新勅撰しんしやくせん羈かり旅りよ、題だいしらず。世よの中ちかの習なひは

命死いのちしなずして常つねなるものにもあれかし、

さらば今いま此こゝ海うみ辺べに渚しづこぐ舟ふねの綱つな手て引ひ

さま、身みにしむばかりあはれも面おも白しろき

を又また幾いくばく度も立たかへり来きて見みんものを、

と也。勝景かちがきにあひて更さらに世よの無常むじやうを觀み

じていへる也。「がもな」の「が」は濁りて願ふ意なり。がなと云に同じ。「かなしも」は悲しきといふにはあらず、そのけしきのおもしろくあはれなりとめで、いふ意にて、「も」は助辞也。

(五〇・ウ)

参議雅経

94 みよしの、山の秋風さよふけて故郷さむく衣うつなり

新古今秋下、擣衣のこゝろを、とあり。山秋風

はげしきにさらに夜更けぬれば故郷人も

寒きに堪ず衣うつよと也。吉野山は奥

深き高山なれば秋風のさまをおもひ

やるべし。故郷は其辺りの里をさせるなる

べし。奈良はいと遠く隔りたれば、いかゞ。

前大僧正慈圓

95 おほけなくきよの民に覆ふかな我たつ袖にすみぞめの袖

(五一・オ)

千載雑中、題しらず。かく法徳もなき身

ををかへり見ず天の下の民に覆ふかな、

わが此山に住、墨染の袖をといふなり。「わが

たつ袖」は伝教大師のうたの詞より即て

比叡山の一名となれる也。おほけなくと

いふ詞の説まち／＼なれど、こと長ければ略つ。

真淵云、負氣無にて俗に大誓になど云が

如しと也。又或説には、おほろげなくの意

にておほ／＼しき事をさりげもなくふる

まふを云にて法徳もなき身にうけはり

て天の下の祈をする意なりといへり。いづれか。

(五一・ウ)

入道前太政大臣

96 花さそふ嵐の庭の雪ならでふり行物はわが身也けり

新勅撰雑一、落花をよみ侍ける、とあり。歌の

こゝろは、花をさそふ嵐の吹雪する庭にあら

で、外にふりゆくものは老たるわが身なり

けりと也。身のふりゆくをいはんとて上の

句はもうけていへるなり。

権中納言定家

97 こぬ人をまつほの浦の夕なぎにやくやもしほの身もこがれつ、

(五二・オ)

新勅撰恋三、内裏歌合恋歌、とあり。こぬ  
 人をまつ夕は身をのみこがすと也。それを  
 まつほの浦といひかけ、焼や藻しほといひ  
 て「身もこがれつ、」といふ也。萬葉に、名寸<sup>ナキ</sup>  
 隅乃云々<sup>スミノ</sup>松帆乃浦<sup>マツホノウラ</sup>二朝名<sup>ニアサナキ</sup>藝尔<sup>ニタモカリ</sup>玉藻<sup>ニタモカリ</sup>苺<sup>モカリ</sup>  
 管夕菜寸<sup>ツクナキ</sup>二藻塩<sup>ニモシホヤキツ</sup>烧乍<sup>ヤキツ</sup>云々とあるをとら  
 れたる也。

### 従二位家隆

98 風そよぐならの小川の夕暮はみそぎぞ夏のしるし也ける

新勅撰夏、女御入内の御屏風に、と有。歌の (五二・ウ)

心は、大かたの川風だにあるを、ならの葉そよぎ  
 夕暮にさへあればすゝしさあまり有て  
 全く秋のこ、ちせらるゝにのみそぎする  
 さまぞまた夏のしるし也けると也。

### 後鳥羽院

99 人もをし人も恨めしあぢきなく世をおもふ故に物思ふ身は  
 続後撰雑中、題しらず。或は世の人ををし

『百首略解』の翻刻と考察

く思召、或は恨めしくも思召せば、かくみちな

き世の中を一方ならで、とやかにとおほし  
 めす故に物をおもはせ給ふ御身なれば、  
 と也。かくおぼしわづらひ給へど、其かひ  
 もなきなれば、あぢきなくと宣へるなり。  
 其御代のことゝもを見て御製のあはれ  
 なるを思ひ合すべし。  
 (五三・オ)

### 順徳院

100 も、しきやふるき軒端の忍ぶにも猶あまりある昔也けり

続後撰雑下、題しらず。一、二の句は序にし  
 て、しのぶといはん料也。さて、忍ぶ草の生たる  
 軒といふにて序のうちに即て大宮のあ  
 れたるさまをきかせ給へる也。かゝる時にあひ (五三・ウ)  
 給ひて昔の王代の盛なりしときを慕  
 ひ忍ばせ給にも猶あまりありと也。も、  
 しきは百石城にて多くの石もてかたく  
 つきたる城といふにて古くは大宮の枕  
 詞のやうなりしを此頃に至りては只  
 宮城の事にいふなり。

〔付記〕

この度、白井固の『百首略解』について調査するにあたり、閲覧、写真撮影などに快く協力してくださった鶴岡市郷土資料館の今野章氏、また閲覧、本の利用を許可して戴いた慶應義塾大学図書館に謝意を申しあげる。本研究は、科学研究費補助金（基盤研究C）「近世後期における地方歌壇の和歌文学研究―山形県庄内地方を中心―」（課題番号19K00316）の成果の一部である。なお、慶應大学蔵本に関しては、直接伝本を調査したが、本文はグーグルブックスを利用した。

# Considerations of "Hyakushu-Ryakuge" from the aspect of "Shonai-kadan" in the late modern period

Yoji FUJITA

Considering the movement of "Shonai-kadan" in the late modern period, this paper introduces "Hyakushu-Ryakuge", the commentary of "Hyakunin-issu", which was made in Tsuruoka. While the author, Shirai Juko, intended to make women and children understand the contents of Waka poems, he also referred to another commentary, "Hyakushu-Iken", in the modest tone.